

第270回 サロン9条例会報告 2016・2・16 参加者 15名

テーマ「もしも、絵本がなかったら」

話題提供 浅井彰子さん（フリーアナウンサー）

浅井さんの話は、まず、アーサー・ビナードさんの『もしも、詩がなかったら』（光文社新書）の紹介から始まりました。以下『もしも、詩がなかったら』からの引用です。

——「もしも」と言っただけで、まわりの世界が、ちょっと違って見える「もしも」から出発して、想像をめぐらしてみると、新天地に到達することがある。「もしものとき」にそなえて、ぼくらは生きのびようとする。詩がうまれるきっかけになるのも、この「もしも」だ。・・・（中略）・・・「もしも」の反対語はなにか？もちろんだこの辞書にも載っていないが、おそらく「もしも」から最も遠い対極にあるのは、思考停止の「しかたがない」「しようがない」あたりだろう。あるいは、諦めを含んだ「無理」か。——

「もしも」はイマジネーション。イマジネーションと言えば、ジョン・レノンの『イマジジン』（新井満・訳）。これを参加者で一行ずつ朗読をしました。新井満さんの「平和を想像することが、平和を実現する第一歩になる」という言葉に励まされました。

そして、絵本は「もしも」の芸術。『さっちゃんのでぶくろ』（内田麟太郎）を浅井さんが朗読。『がまんのケーキ』（かがくいひろし）は参加者三人の群読。『ウラパン・オコサ』（谷川晃一）『まるまるまるのほん』（エルヴェ・テュレ）は全員が大きな声を出したり、本をたたいたり揺すったりしてイマジネーションを楽しみました。

柳田邦男さんは『みんな絵本から』で「絵本や物語をたくさん読んでみると、言葉や感性・感情が発達するとともに物語の文脈理解力も発達する。物語の文脈理解力は人間関係の文脈理解力につながる」と書いています。

引きこもりの方たちも参加する「ピートの絵本倶楽部」（第3木曜午後2時～4時）や小児病棟に入院中の子どもたち対象の読み聞かせ（と折り紙）での浅井さんの活動の報告はあらためて絵本の力を知る感動的な話でした。

浅井さんのお話の最後は素敵な絵本『ラヴ・ユー・フォーエバー』の朗読でした。我が子がいくつになっても語り続ける言葉「アイ・ラヴ・ユー いつまでも アイ・ラヴ・ユー どんなときも わたしが いきている かぎり あなたは ずっと わたしのあかちゃん」を参加者は何をイメージして聴いたのでしょうか？自分が子どもになってあやされているような気分？昔、子どもに歌った子守歌を思い出しながら？これから生まれる孫をあやす自分の姿を想像しながら？・・・皆、とても幸せそうな顔でした。

後半1時間は参加者がそれぞれの思いを語りました。地域で絵本読み聞かせ活動をしておられる方はその経験談を話され、実際に使われている手作りの仕掛けを披露。ある方は昔の子育ての話を。またある方は自分の子ども時代を思い出して・・・どの参加者も浅井さんの話と絵本を見て、聴いてとても幸せな時間を過ごすことができたようです。

もしも、絵本がなかったら、この世はなんて味気ないんでしょう！（筆者感想）